Fashion is The Past

Edit by Takuhito Kawashima (kontakt)

EVERYTHING HAPPENS THAT IS SUPPOSED TO HAPPEN

Helmut Lang, *Untitled*, 2016, enamel, resin, paper, steel, 183 x 61 x 61 cm. Courtesy of the artist and Sperone Westwater, New York.

Installation view, *Helmut Lang*, 2015. Courtesy of the artist and Sperone Westwater, New York.

Installation view, *Helmut Lang*, 2015. Courtesy of the artist and Sperone Westwater, New York.

約5年越しの取材だった。シャイで有名な彼から取材受諾の連絡があり、1週間後にニューヨーク州のロングアイランドにあるアトリエに行くことができた。今のファッションの礎を築いた1990年代の最重要人物の一人とも言える、ヘルムート・ラング。2005年に突如ファッションの舞台から姿を消した彼は現在、コンテンポラリーアーティストとして新たな歩みを始めた。ファッションをやめ、約11年経つが、ラングがファッションの残した功績はいまだに語り継がれている。最近、「VOGUE」で彼のデビューから引退するまでのコレクションをまとめた特集が組まれたことがそれを物語っている。さらに今まさに第一線で活躍するラフ・シモンズ、ミウッチャ・プラダ、それにカニエ・ウエストなど、“ラング信者”の名前を挙げてもきりがないうえ、実際、彼がデザインした服をそうそうたるトップデザイナーたちが参考にするために買いしめているという事実もある。ファッションデザイナーとして成功をおさめたにもかかわらず、アーティストに転身した彼がいう。「起こることはいつか起こるものなのさ。僕がこうしてここにいるようにね。急には起こらないかもしれないけど、いつかは必ず起こるもの」。この言葉を聞けただけでも、ここに来た甲斐があったと思った。

ニューヨークの中心から車で2時間。恋愛コメディドラマ、「SEX AND THE CITY」でも何度か聞いたことがあるほど、ロングアイランドはブランド地名になっており、セレブリティや業界人の避暑地として知られている。残念ながら、取材を行った3月のロングアイランドは、オフシーズン真っ只中で、食べる物に困るほど、町は閑散としていた。そんなロングアイランドにヘルムート・ラングはもともと農家が所有していたという広大な土地のシェーカーハウスを1999年に購入した。まだファッションデザイナーだった頃だ。

「18世紀に建てられた家なんだ。1950年ぐらいまで農家の人たちが実際に住んでいた。今はリノベーションしてモダンになっているけどね。場所もすごくよくて、古い家から感じる独特の雰囲気も気に入っている。でも、夏にたくさんの人がニューヨークからここに来るようになってからは、困っているんだけどね」

リビングやデスクワーク用の作業場があるメインの建物、アートピースの制作をするワークショップ、そしてゲストハウスの3棟と大きなオーガニック・ファームがラングの敷地内にある。この日ご馳走になったランチも、ゲージで飼っている鶏が産んだ新鮮な卵を使ったオムレツだった。アルネ・ヤコブセンのオックスチェアとフランス製のヴィンテージのソファなどが並び、真っ白の暖炉があるリビングルーム、それに部屋にはジェニー・ホルツァーやルイーズ・ブルジュアといったアーティストの作品が無造作に置かれている。ラングが生活を営む環境を記録したく、コンタックスのフィルムカメラを首にぶら下げていたのだが、撮影は一切許されなかった。

「申し訳ないね。でもパーソナルな部分は、誰にも写真を撮らせないようにしているんだ。プライバシーがなくなってしまうのが怖くて」

ポートレイト撮影も、基本的には長年の友人であるブルース・ウェバーとヨーガン・テラーにしか撮らせない。シャイという形容詞は違うのかもしれない。彼は信頼という言葉を大切にする人だ。

オーストリアのウィーンに生まれ、パリ、そしてニューヨーク。10年ごとに拠点を変え続けてきた彼だったが、ニューヨークに来てから、もう20年近くなることに、本人も驚いていた。

「90年代後半は、まだ古き良きニューヨークの雰囲気が残っていて、若いクリエイティビティとエレガントが共存する街だった。今は家賃が高くなってしまい、若い人たちが街から姿を消してしまっているのは、ものすごく残念なこと。でもね、今のニューヨークは住みやすいよ。今、ニューヨークよりも自分に合う街が他に思いつかない。時代とともにアップスケールな街に変わってしまっているけど、アメリカはもちろん、世界中からいろいろな人がニューヨークにくることは今も昔も変わらない。まだまだ魅力的な場所さ」

ラングは、ファッションデザイナーだった頃から、異様なクリエイションで多くの人を魅了していた。彼が手掛ける服はもちろんのこと、ジェニー・ホルツァーの作品を取り込んだショップをニューヨークに作り、また毎シーズン発表されるキャンペーンも、写真家のロバート・メイプルソープの作品とヨーガン・テラーの写真を並列して使ったりと、今の広告にありがちな、洋服そのものを前面に打ち出したり、スーパーモデルに着せるといった退屈なものとは一線を画すものだった。ヘルムート・ラングのキャンペーンは今見ても、群を抜いてクールだ。

「もともとアーティストになりたい気持ちはあった。ウィーンに住んでいる時も、アーティストのコミュニティにいて、週末はよく彼らと一緒に過ごしていた。その時間が大きいかもしれない。それに90年代には、今や親友のジェニー・ホルツァーやチャーミングなルイーズ・ブルジョアといった素晴らしいアーティストたちにも出会えることができた。僕は、たまたまファッションの世界に入って、成功しただけさ。偶然の出来事として自分は認識している」

そして、2005年に突如、自身が創立、経営し続けてきた会社をプラダグループに売り、完全にファッションの世界から姿を消した。アーティストとしての道を選ぶことを決断したのだ。

「言うほどタフなことではなかった。ちょうど50歳になるところだったし節目だったのさ。それにファッションデザイナーとしてやるべきことはすべてやったと思うんだ。このままファッションをやっていても、ただ歳を重ねるだけなのかなという気持ちもあった。だから、何か新しいことをやりたいと思っていた。チャレンジしたいってね。新しいことをスタートするのは、成功を続けることよりも難しいこと。それに、自分の中で、みんなが簡単に『かっこいい！』とか『いいね！』と言えないようなことをやってみたいと思ったんだろうね」

きっとラングほどの才能があれば、アートとファッションの2つのフィールドを両立することもできただろう。しかし、中途半端なことを一切やらず、なんでもその冷静な眼差しで細部に至るまで突き詰めて形にしていく彼は、2つの世界でクリエイターとして成功することの厳しさをわかっていたのだ。

しかし、ファッションデザイナーだった頃の経験はアーティスト、ヘルムート・ラングにとっての基礎となっている。ワークショップのベースメントを見たとき、素材は違えど、作品のほとんどがモノクロだった。まるで彼がデザインしていた服のように。

「服をデザインしている時も同じだったんだけど、ものを考える時に、黒か白からスタートするのが僕のやり方なんだ。形ができて、もし色が必要だと思うと、そこから色をつける。なぜなら、ちゃんと形を見たいし、見せたいから。色でごまかすようなことをしたくないんだ。そういう意味で、黒と白っていうのは、一番ニュートラルな色だと思っている。でも、ワークショップの1階は見たか？ 一応、いろいろな色の作品があったはずだ。琥珀を使った作品とか、カラフルな作品もあっただろ？モノクロにとらわれているっていうわけではない」

ラングは、毎年大きなエキシビションに少なくとも2度展示し、そして世界各国で開催されるグループ展にも意欲的に参加している。

「僕の作品は、すべて売り物。自分のためとか特別なクライアントだけに作るなんて、そんなの趣味と同じさ。だからといってオーディエンスを意識して作ったことはない。自分が服作りをしていた頃も、そんなこと意識したことはなかった。驚きだと思うけど。自分がやるべきことをやって、自分が作りたい服だけを作っていた。というのも、僕が作るものに、共鳴してくれる人は、必ずどこかにいるし、その人たちはそれを探し求めてくるはず。アートもそれと同じ考え方さ」

ラングのアート作品の多くは、特別な素材を使うことはなく、シープスキンやウッド、それに紙やゴムなど、いわゆる日常的な物質＝ファウンドオブジェクトを素材にしていることが多い。

「僕がゴムを使ったスカルプチャーを作るきっかけになったのは、あるゴムのかけらをビーチで拾ってね。すぐに漁

師に聞き込みをしたんだ。『このゴムに見覚えあるか？』って。そしたら、ある漁師が、『今はもう使ってないけど、もし欲しいなら、手配できるぞ』って言うんだ。親切な彼は1カ月ぐらいかけて探してきてくれた。“ファウンドオブジェクト”って、そこら辺を歩いているだけで、偶然見つかるものじゃなくて、ほとんどの場合がこちらから能動的に探すものさ。今制作しているスポンジの作品も、たまたま見つけたものではない。というのも、ある一つのマテリアルで制作を貫くアーティストもいるけど、僕の場合は、使う素材に制限を設けたくない。その時、その時でインスパイアされたマテリアルを使い、作品にしたい。きっと素晴らしいものに変身してくれるって信じてね。だからどんな作品もドローイングは一切していない。考えながら作る実験的なアプローチでいつも制作する。たまに間違えることもあるから、その場合はまたゼロからスタートさ。それを何度か繰り返しているうちに、何か強いものを感じることがある。スカルプチャーからこうしてほしいとメッセージを感じるんだ。それで、もしそれが単体で強いと思うように感じたら、それがやめ時かな。ファッションデザイナーだった頃も事前に紙に描くようなことはしなかった。なぜならドローイングをしてしまうと、自分にある意味しばりを設けてしまう。作り始める前から、結果が見えてしまうのは退屈だ」。

固定観念なのか。どこかで、コマーシャルの中で生きるのが、ファッションデザイナーで、自由な時間の中でやりたい時に作品作りをするのがアーティストだという区別があった。しかし、ラングの話を聞いているとそうでもないらしい。

「それは君たちの空想さ。こっちは常に何かを生み出そうと毎日必死。でも、毎日、何かが形になるとは限らない。確かに、ファッションの頃ほど、今の僕には明確なスケジールはない。当時は、毎日スタジオに行かなくちゃいけなかった。でも行くことで、毎回すごいものができるわけじゃない。家に帰って、『一体自分は今日、何をしてたんだ？』と思う時が何回もあった。でも次の日、ものすごくいいアイデアを思いつくこともある。クリエイティブっていうのは、決められた思考があるわけでもなければ、決められたプロセスがあるものではない。何年もチャレンジし続けても、うまくいかないことなんてたくさんある。そういうものさ。ワークショップにあるスポンジの作品も、去年からずっとやっているんだけど、完成までやることはたくさん残っている」

ありきたりだが、ラングにこんな質問をしてみた。ファッションはアートになりうるのか、と。

「ファッションをアートとは思わない。でも、一部のデザイナーはアーティストだと思う。例えば、川久保玲。彼女がやっていることは本当に素晴らしく、あれはアートだろうね。評論家じゃないからわからないし、アートとファッションの境界線は見る人によって違うと思う。僕が川久保玲の名前をあげた理由は、彼女が作り上げる洋服の形そのものが素晴らしいからさ。着る人がいなくても、服だけをスカルプチャーとして見せても、それが成立する力が彼女のデザインにはあるから」

4月16日からテキサス州のダラスにあるダラスコンテンポラリーで開催されるグループ展は、ダン・コーレンやパオラ・ピヴィといったアーティストが参加する。そのオープニングに合わせて、作品をインスタレーションするために、苦手な飛行機に乗っていくというラング。ファッションデザイナーだった頃、フィナーレでも姿を見せないラングがアートエキシビジョンのオープニングに顔を出す予定だと聞き、驚きを隠せなかった。

「いや、正直なところラスト1分前になるまで出席するかわからない。行かないことも十分にありえる。デザイナーだった頃もそうだったけど、この不安な気持ちは昔から変わらないね。前に出て話したがりの連中はどこの世界でもいるけど、僕の場合は、それをすること自体が重要なことだと思ったことがない。みんながこっちにきて挨拶してきても、正直何を返事すればいいのかわからないし、すごく疲れてしまうからね」。

ヘルムート・ラング
1956年オーストリアのウィーンで生まれ、現在はニューヨークを活動の拠点とする。80年代後半からファッションデザイナーとして活躍。90年代中頃から、ルイーズ・ブルジョアやジェニーホルツァーとったアーティストとコラボレーションをはじめ、次第にアートに惹かれるようになる。そして2005年から、本格的にアーティストとしての活動をスタート。過去には、フィレンツェビエンナーレ(1996)や、クンストレ・ウィーン(1998)やケストナーゲゼルシャフト(2008)、マーク・フレッチャー(2012)、スペローネ・ウェストウォター(2015)などがある。

Helmut Lang, *Untitled*, 2014, resin, pigment, tape, string, cardboard, 66 x 28 x 11.5 cm. Courtesy of the artist and Sperone Westwater, New York.